

ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団ニューイヤーコンサート - 中継・録音プロジェクトについて

デトモルト音楽大学
金井 哲郎

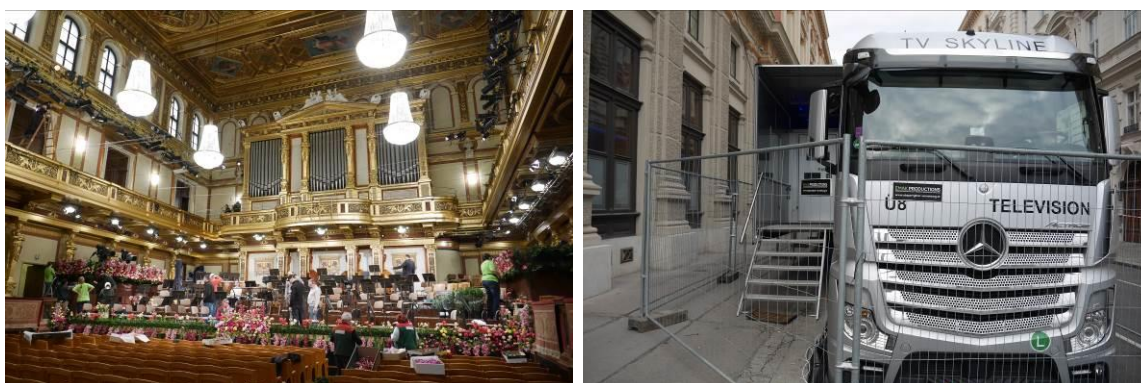
はじめに

2012年に渡独して早いものでもうすぐ8年が経とうとしている。これまで片手で数えられる程の日本人しか足を踏み入れてこなかったドイツ・デトモルトのトーンマイスター専攻を、無事に卒業する事ができた。この間、これまで日本人がなかなか経験できなかった様な事を沢山経験してきたと思っている。これらの貴重な経験を少しずつでも日本に伝えられたらと思うようになり、今回JASジャーナルへの寄稿という形で筆を取る事となった。

初めてこの様な文書をメディアに書かせて頂くにあたって、一つ目の題材がウィーン・フィルハーモニー管弦楽団のニューイヤーコンサートであることを非常に嬉しく思っている。ここではそのテレビ・ラジオの生中継とCD用の録音についてレポートする。

1. 演奏者及びコンサートについて

ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団(以下ウィーンフィル)は言わずもがな世界トップオーケストラの一つである。今年はラトヴィア生まれの若手指揮者アンドリス・ネルソンスが初めてニューイヤーコンサートの指揮台に上がった。音楽の都ウィーンで毎年元日に行われるニューイヤーコンサートは世界中に生中継される事もあり、世界で最も注目の集まるクラシック音楽コンサートではないだろうか。今年は世界90か国以上で生中継がされおよそ4000万人が中継を視聴し、同様に世界の約40のラジオ局ⁱⁱでも生中継がされたようだ。



舞台全景（左）、ホールに横付けされた中継車（右）

2. 中継・収録チームとフォーマット

映像・音声共に生中継はオーストリア放送協会(以下 ORF)が担当していた。テレビ・ラジオ共に5.1chのサラウンド放送であるが、テレビとラジオは別々のチームが担当し、別室で全く別にミキシングがされていた。曲間に話すアナウンサーとアナウンspbースも別々に用意され、別の

原稿を読んでいた。ソニークラシカルから発売される CD 用にはベルリンの音源製作会社 Teldex のスタッフが機材を持ち込み、アナログで分岐された音声を別室で録音していた。

ブルーレイ・DVD も同じくソニークラシカルから発売されるが、こちらは ORF によって製作された放送用の映像・音声をベースとしており、CD とは全く別のミックスである。放送・販売される音声の最上位フォーマットを以下にまとめた。

テレビ放送：5.1ch

ラジオ放送：5.1ch

Blu-ray：Auro-3D (9.1ch)

DVD：5.1ch

CD: 2ch

2. スケジュール

このプロジェクトは以下の様なスケジュールで進められた。私は 28 日午後のリハーサル前から 1 日のコンサート終了までの、(ごく一部を除く)全てのリハーサル・コンサートに立ち会い取材をさせて頂いた。

12 月 21 日頃から 照明等の設置

26 日 マイク等の機材セッティング

27 日 午前・午後リハーサル

28 日 午前・午後リハーサル

29 日 通し稽古

30 日 11 時 コンサート、終了後短いパッチセッション

31 日 19 時 30 分 コンサート

1 月 1 日 11 時 15 分 コンサート (テレビ・ラジオ生中継)

10 日 CD 発売 (日本版は 29 日)

31 日 Blu-ray/DVD 発売 (日本版は 2 月 19 日)

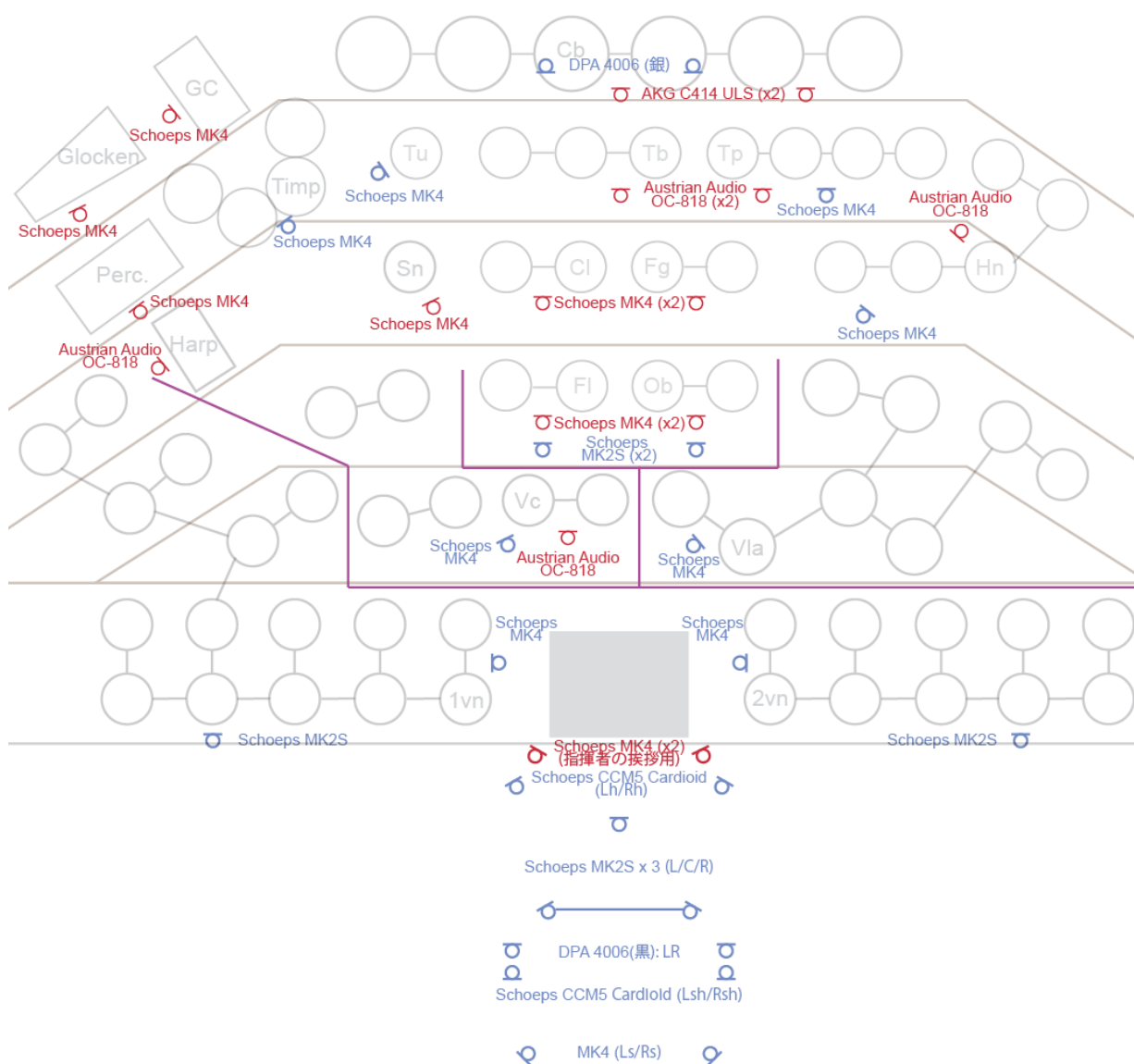
私は立ち会えなかったが、音声技術に関しては既に 26 日にセッティングがされていたようだ。リハーサルが 2 日間、一度の通し稽古(GP:ジェネラルリハーサル)が行われ、30 日の 11 時から一度目のコンサート、31 日の 19 時 30 分から二度目のコンサートが行われた。1 月 1 日の 11 時 15 分からは三度目のコンサートで、このコンサートの模様が生中継された。この三度のコンサートは、アンコールも含め全て同じ曲目で行われていた。アンコール前に指揮者が一言発する言葉まで一緒である。

リハーサルの日程は多少前後・増減する事もあるそうだが、12 月 30 日の午前、31 日の午後、1 月 1 日の午前の、計三度コンサートをするというスケジュールはここしばらく変わっていない。26 日にセッティングされた後は音声技術に関わる人々も基本的には毎日ホールに来て、確認や調整をしている。30 日と 31 日のコンサートは、お客さんの入った普通のコンサートであるが、生中継のリハーサルとしての意味合いも強く、本番さながらの緊張感を持って作業をしていた。30 日と 31 日の演奏会後には映像監督らが集まって映像を確認し、元日の放送の為に細かな調整をしていた。

特筆すべきは 30 日の一度目のコンサート後に行われたパッチセッションである。このセッションは主に CD の為だそうだ。曲中に雑音などが入らないテイクを 29 日の通し稽古までに録音するように努めていたようだが、30 日のコンサートまでに良いテイクがなかった曲やどうしても録り直しておきたい数か所を録音していたようである。(このセッションの予定を私は事前に聞いていなかったため、残念ながら立ち会う事はできなかった。)

4. マイキング

私が取材した限りでは、以下のようにマイキングされているようだった。ただし、全てのマイクを一つずつ確認できたわけではなく、この通りではない可能性もある事をここにお断りしておく。青字はワイヤーで吊られていたもの、赤字はスタンドで立てられていたものである。



数年前からニューイヤーコンサートは Auro-3D フォーマット(5.1+ハイト 4ch)で録音されている。デッカツリーと AB の 2 つのフロントメインシステムが用意され、リアに単一指向性が 2 本、そこにさらにハイトチャンネルが加えられている。

映像チームが楽友協会大ホールに入る事は稀だそうだが、ラジオでは頻繁に中継がされている。ラジオチームのトーンマイスターに聞いたところ、普段は双指向性を 4 本必要とするハマサキスクエアを使用しているそうだが、今回はチャンネル数の関係から単一指向性のマイク 2 つを Ls/Rs にアサインしているとの事だった。

殆どのマイクはドイツ Schoeps 製である。その他にはデンマークの DPA、オーストリアの Austrian Audio、AKG のマイクが使用されていた。2018 年に新しく創設されたばかりの Austrian Audio のマイクは、ORF でまだテスト中で購入したわけではないと説明を受けたが、低ノイズで非常に良い印象であると複数の ORF のトーンマイスターからポジティブな意見を聞いた。

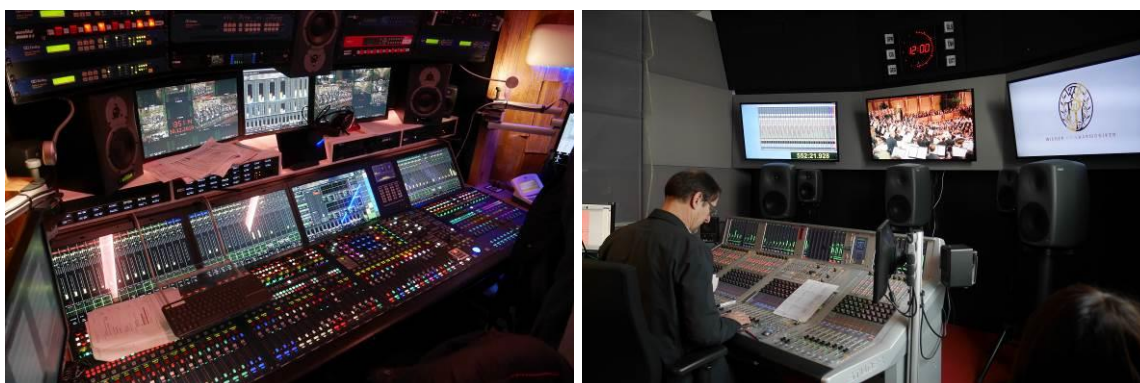
吊られているマイクとスタンドの 2 つ用意されている事について聞いてみると、テレビ用には主にスタンドのマイクが使用されより直接的な音を入れ、ラジオ用には吊られたマイクを使用して少し距離間のある音を表現しているとの事であった。ラジオチームのミキサーを細かく見させて頂くことができたが、実際にミキシングしているレイヤーに立ち上げられてもいない様であった。映像で映っている楽器の音ははっきり聞こえない事は不自然に感じられてしまう事があり、それを避ける為に近いマイクを使ってミックスしているようだ。ラジオの方がより、自然に交じり合う音をとって感じられるようなミックスを心掛けていると伺った。

5. ミキサー・録音機器

全てのマイクの信号はまず建物内の常設されているラジオ用ミキシングスタジオ横の機材ラックへ送られている。そこにパッチ盤があり、まずラジオ用ミックスに使われる常設の Studer Vista9 に入力され、ダイレクトアウトをスプリッターに送り、そこからテレビ用と CD 用に送られていた。テレビ用にはラック横の窓からケーブルを出し中継車に送り、CD 用には建物内のアナログ回線を用いて送られていた。

テレビチームはドイツ TV Skyline 社のレンタル中継車内でミックスしていた。ミキサーは Lawo の mc²56 で、モニタースピーカーは Dynaudio 製であった。私が短い時間で確認した限りでは Steinberg の Nuendo に、5.1ch のミックス後の音声が録音されている様子を見る事ができた。

ラジオチームは上記の常設スタジオでミックスしていた。Studer Vista9 でサラウンドミックスされ、時折ダウンミックスのステレオを確認するというスタイルであった。モニタースピーカーには Genelec の 8260 がサラウンドで、8240 がステレオで使用されていた。



中継車内（左）、ラジオ用ミキシングルーム（右）

Teldex はアナログで受けた信号を持ち込みの機材で録音していた。オーディオインターフェースとして Merging Technologies の Horus が、DAW は同社の Pyramix が使用されていた。Pyramix 用のコンピュータは 3 台用意され、AoIP 規格の一つである Ravenna で分配され、3 台同時に録音されていた。メインの 1 台には Avid の Artist Mix と Artist Control が繋がれ、Studer のスピーカー A5 を用いてミックスされていた。



Teldex のミキシングルーム（左）、本番終了直後舞台上手に集められたマイク（右）

6. ポストプロダクション

生中継はもちろん放送されてそれで終わりだが、Blu-ray に収録される Auro-3D 用に放送終了後から ORF 局内のスタジオでミキシングされている。ミキシングといっても、基本的には 5.1 でテレビ放送されたものにハイトチャンネルと足すというスタンスで、大幅にミックスし直す事はないようだ。

CD 用には 1 日の本番終了後からすぐに編集作業が始められ、当日の夜には指揮者と一緒に聴いて確認をすると聞いた。その後マスタリング作業を経てプレス業者に送られ、10 日には CD として発売された。通常の CD 製作スケジュールと比べると、全く驚くような少ない日数である。毎年録音しているという事もあるのだろうが、非常に合理的に作業が進められている一端を見る事ができた。

7. おわりに

ここまで2020年のレポートを書かせて頂いたが、実は私は2019年のニューイヤーコンサートの時も訪問していた。懇意にしているORFのサウンドエンジニア、フローリアン・カメラー氏と一昨年の夏にお会いした際に、見学に行っても良いかと気軽な気持ちで聞いてみたら、もちろん構わないとのありがたいお返事を頂いたためである。昨年はORFテレビ・ラジオ、Teldexに加えて、さらにNHKのチームが来ていた。今回の収録でも非常に多くのマイクが使用され複雑なプロジェクトであったが、昨年はさらに22.2chミックス用にさらに多くのマイクが使用されていた。22.2ch音声の中継車と8Kの中継車が楽友協会の横に設置され、カメラもNHKの8Kカメラが追加され、このプロジェクトはさらに大掛かりなものになっていた。

楽友協会にはそれまでも何度も足を運んできていたのだが、毎年テレビで見ていたニューイヤーコンサートの場に来て、「憧れの所に来てしまった!」といったような、嬉しい気持ちがとても強かった。それまでに見てきた普段の楽友協会大ホールとは照明の数が桁違いで非常に明るく、無数の花々がホール全体を華やかな雰囲気の中で包んでいた。この雰囲気を特別と感じるのはおそらく私だけではなく、聴きに来る多くのウィーン市民も感じているのではないだろうか。この特別な雰囲気を現在では約4000万人がそれぞれの聴取環境で楽しんでいる。ステレオからサラウンドになり、Auro-3Dや22.2chへと更に臨場感は増し、アナログのテレビでステレオ音声を聞いていた頃からは想像もできなかった進化を目の当たりにしている。また、ウィーンフィルのニューイヤーコンサートは、クラシック音楽に普段馴染みのない人々にもその魅力を伝える役割も担っていると良いだろう。この進化し続ける生中継と録音プロジェクトを通じて、クラシック音楽リスナーの裾野が広がって行く事を心から願っている。

ここに、今回の取材に立ち会って案内をしてくれたORFのサウンドエンジニア、フローリアン・カメラー氏をはじめ、親切に話を聞かせてくれたORFとTeldexの皆様、そして私と日本オーディオ協会とを繋いでくださった名古屋芸術大学の長江先生に謝意を表してこのレポートを終わりにしたい。

執筆者プロフィール



金井 哲郎

東京藝術大学大学院修士課程修了、同大演奏芸術センター教育研究助手を経て、ドイツ・デトモルト音楽大学トーンマイスター専攻を卒業。現在同大大学院とブリュッセル王立音楽院で学びつつ、フリーランスの録音プロデューサー及びバイオリニストとして活動している。

i ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団オフィシャルウェブサイト

<https://www.wienerphilharmoniker.at/neujahrskonzert/neujahrskonzert-main>

ii vienna.at

<https://www.vienna.at/live-wiener-neujahrskonzert-2020-hier-koennen-sie-das-konzert-live-s-ehen/6470613>